HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一九世紀における政党政治の一断面：Whigs and Liberals in the West Riding, 1830-1860 by Thompson, F. M. L., Eng. H. R. vol. L X XIV. 1959を通じて
Author(s)	小川, 晃一
Citation	北大法学論集, 13(2), 191-211
Issue Date	1963-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/27814
Type	bulletin (article)
Note	研究ノート
File Information	13(2)_P191-211.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

一九世紀における政党政治の一断面

―― Whigs and Liberals in the West Riding, 1830-1860 by Thompson, F. M. L., Eng. H. R. vol. LXXIV. 1959 を通じて ――

小川晃一

産業革命の結果は貴族、地主ジェントリーが主体となっていた政治的階層構造にインパクトを与えざるをえない。彼らが当然に支配階層であるべきだという観念は次第にくづれつつある。三二年のリフォーム運動はその典型的な徴候であった。トーリーはリフォームが旧アリストクラシー（以後貴族と地主ジェントリーを含むものとする）の支配をやがて崩壊させることになるであろうとみて消極的な態度をとるが、ホイッグは政治の、とりわけ政党のタクティックスからくる論理によってリフォームを遂行する。「トーリーの見透しはやがて正しいことが証明される、がしかしホイッグのなしたことは不可避的なことであった」(1)。十九世紀の四分の三世紀はそれ以前の政治構造からそれ以後の政治構造へと移る過渡期であって、双方の要素が重層しているともいえるだろう。双方の要素を見別けるということは重要な歴史学の課題であろう。しかしながらこうしたアプローチの仕方をとるときには、二つの要素を体現する人々がどのような態度によって状況に適応してゆこうとしていたか、という緊張した適応態度を照射する視度が落ちてしまう。アリストクラシーが新らしい状況に適応してゆくプロセスは決して摩擦のないものではない。このプロセスの中でかつては新らしい状況と妥協した人々や世代さえも更に新らしい状況が出現した場合にはこれと妥協することがいかに困難なものであるか――不可能に近いか、ということがわかるであろう。結局は、英国のアリストクラシーは、後退しながらも、

一つの新らしい視点を獲得することによって再び政治的階層としての優位を維持することに成功する。他方、新らしい勢力である中産階級もまた前進した地点において、旧いアリストクラシーを自己よりも優位した政治的階層として承認する。こうして再び新らしいバランスが回復されるのである。

ここに紹介する論文は以上のような事情をよく例証してくれるであろう。一八三〇から一八六〇年に到る時期は、三二年のリフォームや四六年の穀物条例の廃止をめぐる大きな政治運動を含む時期であり、産業の発達と産業中産階級の生長が政治に大きなインパクトを与え、あるいみでその勝利が収められた時期である。また、本論文で対象となっている地域は単に地方的な意義を有するだけではなく、全国的な現象を十分に代表しうるものである。当地の人たちは「自分たちの政治は広く全国的な与論の動きを表現していると信じていた」のであり、当時の偏見のない観察者もこのウェストライディングの選挙の結果が全国的な意義をもっており、マクロの政治世界でおこる与論の移動を示す「シグナルな出来事」である、としているのである。四七年にコブデンがこの地方の議員として選ばれたということはこういった事情を文字通り説明してくれるであろう。また本論文はガッシュの扱った「ピールの時代」を含みながらその時期をこえ、ハナムが扱ったグラッドストーン、デイズレリーの時期[2]に橋渡しするという意義もものであろう。

紹介者は紹介の後、本論文を素材としてホイッグ、より一般的に英国アリストクラシーの政治的適応の態度を考えてみることにする。

ヨークシャーの選挙区 West Riding (以下W・Rと略す)は一八三二年にヨークシャー州選挙区が分割されてできたものである。一八六五年に更に分割されるが、その間最も大きな選挙区であった。同州の Knaresborough や Northallerton のごときは選挙人三〇〇に満たなかったが、ここでは一八三六年には二九、〇〇〇、一八四六年には三六、〇〇〇もの選挙人があった。「州選挙は廉潔で独立な意見を表明する廉潔で独立な投票者によって行なわれる」と屢々云われた。また大きな選挙区程通常貴族の影響力 aristocratic influence から独立なものである。W・Rはこれらの有利な条件をもっているにもかかわらず、選挙人が独立な判断によって投票決定をなしていたとは云い難かった。「真理は中間のどこかにあった」。巨大な土地貴族でさえこの巨大な選挙区では十分な統制をなしえない。としても勢力があり活動的な貴族たちノーフォーク、デヴォンシャー、フィツウイリアム、スケアバラ、エフ

インガム、カーライルまたハートフォード、ド・グレイ、ヘアウッド、カーディガン、ウィルトン、ウォーンクリフがいた。この時期の選挙人には六、〇〇〇内外の五〇ポンド居住借地人がおり、他は大部分自由保有人であった。従って貴族やジェントリーが借地人をすべて把握したところで、つまり彼らが「経済的な」把握のみに依存している限り多数派をうることはできない。彼らは借地人の範囲をこえて非経済的な影響力を及ぼしていたのである。自由保有人は大部産業地帯に住んでいた。一八四八年には三三、〇〇〇の選挙人のうち、一四、六〇〇が産業地帯に、約一〇、〇〇〇が農業地帯に、八、七〇〇が混合地帯に住んでいた。従って抽象的に考え産業による一つの大きな勢力が形成されるなら、それは多数を獲得することができる。もし政治が階級制の上に立つならば、土地所有者の勢力は決定的に少数派とならざるをえない。しかし現実には政治上の分割は階級区分をクロスしていた。分割は利益、意見、タクティックス、それに伝統によってなされていたのであり、産業層の投票は借地人の投票と同じく分かれていたのである。こうした分割の上に均衡が保たれていた。他の大部分の州選挙区と違って、貴族やジェントリも、また農業に依存している貿易業者も完全な統制力をもたず、巨大な活力ある商工業の勢力と地盤、影響力を分け合わねばならなかった。

リフォーム以前のヨークシャーの政治はフィッツウイリアム（以後Fと略す）家とラスケル家、ウェントワース・ウッドハウスとヘアラッドとの争いであり、この争いは激しい選挙戦として展開されたこともあれば、また出費を避けるために二つの議席を分け合って落着くこともあった。F伯はW・R以外での領地であるマルトンでは話し合いをせずに「独裁的」な政治を行なっていたが、この流儀をW・Rにもちこもうとは考えず、ここでは譲歩と妥協によってリーダーシップをとろうと思っていたのである。勿論このリーダーシップに疑問をもつような者は「干渉」と「独裁」という許すべからざる「罪を犯す」ものだとされる。アリストクラシーの政治的影響力は若干落ちているとはいえ、リーダーシップがセンスをもって巧みにまた穏かに行使されているなら、リフォーム以後といえどく容易に維持されえたのである。アリストクラシーの神話には愛着伝統尊敬が豊かに蓄積されていた。また富裕な土地所有者が代表者になる場合の方が実際上の利益もあったのである。この利益やタクティックスがなくともF伯は大多数の地主ジェントリー層からは容易に支持をうけることができるであろう。「政治について私と同じ立場をとっている紳士は、あなたの家（F家）に数世代に亘り感謝すべき義務を負っておりますので、あなたの家の方の誰でありましょうともヨーク州を代表な

さろうとなさいます方にはあらん限りの援助をおしむものではありません。そうしない者は重大な反逆を犯すことになると存じます。」この論文で扱われる時期のW・Rの政治はF伯に体現された領主層の勢力が持続し、変容し、危機に陥り、再び回復されるプロセスである。

ホイッグとホイッグ・リベラル（以後W・Lと略す）の都市民との同盟は一八二六年に、つまり当時ミルトン子爵であったF伯がベイン（リーヅ・マーキュリー紙の編集者）の後援をうけたマーシャルと州の議席を分け合った時から始まる。マーシャルは巨万の富を有する紡績工場主、自由貿易論者であり、ディセンターであった。こうした妥協は（モーペス卿とブルーアム）一八三〇年にもある程度可能であった。三〇年以後五九年まで一人の例外（コブデン）を除き妥協の結果立てられた議員はすべて領主階層のものであって、W・L党内の商業、都市的な要素は二つの議席の中一つもとることができなかった。「代表者は地主ジェントリーから選ばれたが、このことは議員となることが閑暇と独立のための財産を必要とするということから理解できるのである。コブデンさえも紡績業と議員活動とを両立させることはできなかった」のである。

リフォーム直後は選挙制度改革論者たちの人気は圧倒的だったので政党組織が必要であるとは考えられなかった。党活動の新しい技術、投票者の登録の後見と監視を発展させることに最初の一歩をふみ出したのはトーリーであった。この結果は三五年総選挙でのトーリーの勝利となって現われるのである。登録運動がいかに有効であったかは次のデータによっても明かである。三二と三四年の間英国全体の選挙人は四パーセントも増加していないが、保主党登録協会が活発に動いたといわれている州選挙区では一〇―二九パーセントの増加があった。この間W・Rでは五名ネットの増加があったにすぎない。三四年―三五年では、英国全体の州選挙人は二〇パーセント以上増加した。最高の増加は八八パーセントであり、W・Rの増加は第二位六三パーセントである。一年間で一八、〇〇〇から約三〇、〇〇〇に達した。

リフォーム以来自由党の登録団体のようなものはあったし、F伯も早くから政党の組織化には関心をもっていた。がしかし党組織に積極的な関心を抱いたのは三五年のトーリーの勝利に刺戟されてからである。こうして The Riding Reform and Registration Association が作られることになった。党が登録機関としての機能を加えられたとき、一見すると些細なことのようにみえるこの機能はルーズな政党組織をひきしめ、勢力配置に重要な影響を与えるのである。潜在的な味方、敵の選挙人の登録、削除、このた

めの費用の徴集等をきっかけとして「臨時」の集団によっては果しえない党活動の持続化、情報と交通の改善がなされるのである。権力の重心はこうした日常的な活動を組織する人々の手に移行してゆく。大地主フォークスの下に(州)中央組織が整備され、F伯の弁護士がその書記になるとともに、中央に対するホイッグ地主層の把握は一段と増した。がしかし、中央の機関は地方からの委員が参集するときだけ活動するにすぎないのであって、委員の母体である地区協会こそ真に持続的な生命をもつようになるのであって、ここでの活動こそ勢力布置の基礎となってゆくのである。

一八四一年総選挙まではW・L党内の種々の要素間の関係は円滑にいった。ところがこの選挙で二人の候補者モーペスとミルトン卿はトーリーのウォートリーとデニスンに敗れてしまった。この選挙は穀物条例の問題が激しい争点となっており、F伯も農業問題での運動にホイッグの失敗を帰している。しかしこの重要な農業問題が争点になっていない三七年選挙においても以前からの選挙運動方式に従うことによって既にウォートリーはホイッグに接近してきていたのである。いづれにせよW・L党は登録運動による党組織の強化を痛感せざるをえなかった。ところがこの強化は反穀物運動とともに都市民の勢力を伸ばすことになる。これこそ旧ホイッグ派をおどろかす事態の始まりとなったのである。その後暫くの休止状態が続くが、四四年次期選挙が迫り更に産業景気が回復しやがて政治に関心が向けられる。穀物条例の廃止運動が活潑になり、「同盟」のW・Rにおける登録運動が活動的になるのもこの時期である。こうした中で地主層のアパシーに対する都市民の不満がもりあがるのである。「産業地帯選出の議員はホイッグ紳士層のアパシーを云々している。、、、とはいうものの彼らは紳士たちを自己の指導者として認めているし、紳士たちがそうしてくれるなら代表を紳士たちから選ぶことを望んではいる。」しかしすぐれたホイッグの政治家でありW・Rのホイッグ指導者の一人であるウッド（間もなくラッセル内閣の大蔵大臣になる）は、同盟の登録運動は相当危険な要素をもっているとF伯にロンドンから書いている。自由党の都市民は、とりわけ自由貿易をかちとるために登録運動において登録協会と同盟との正式の協同を申告し、四〇シリング自由保有を買いとって新有権者を創出できるように同盟からの援助の期待とその利用にについて、党会議に提案した。会議はこの提案は拒否してしまうが、地方穀物条例廃止同盟の有力メンバーを出している自由党都市民が活潑に運動することを妨げることはできなかった。同盟運動の「危険」は次のような方法に典型的に現れる。先づ工場主が五〇名位のグループに建物をうり、後者はそれを共有する、買収と同時に彼らは工場

主に建物を賃貸し賃貸料が年四〇シリングになるようにきめるのである。買取った人のうちには当工場の労仂者もいたが大部分の人はそうではなかった。こうした方法に最も批判的だった人さえ彼らが「完全に尊敬すべき人たち」であり、商人、独立職人、デイセンターの牧師、貿易業者、専門職の人等であることを認めている。また極めて多くのランカシャー人がこうしてW・Rの選挙人になったことも確かであるが、土着の人もかなり多かったのである。更にこの操作がマンチェスターからの指図でなされたといって批判されもしたが、この批判にはかなり正しいところがあるとしても、実行はW・R人によってなされたということも確かである。いづれにせよ新有権者は自己の貯蓄によって財産資格をえたのであって、同盟はなんらの経済的援助も与えなかった。ただ売却人と購入者を集めるための宣伝や便宜を与えたにすぎない。購買人は自由貿易論者であったろうが、しかし独立的であった。少なくとも領主たちに依存し大農地の分割をうけた借地農よりは独立的であった。以上のような運動の結果四五年以後の登録では自由貿易論者が多数を占めることになったのであり、四六年のモーペス卿の補欠選出はその効果の現われであった。彼は自由貿易論者であって同盟に基金を与えており、工場主と土地所有者の支持をえたのである。この結果はF伯の気にも召した。しかしながら自由貿易論者が一名だけの彼らの代表で満足するであろうなどとはも早考えられないことであった。

こうして四六年に大蔵大臣となったウッドはF伯にホイッグと都市民との関係に関心を十分に払うように説かざるをえない。「最早古い意味でのライディング・ホイッグは存在しません、あなたが御子息を当選させるおつもりなら自由党の頭として行動しなければなりません。自由党の力は都市民にあります。新しい有権者たちはウェントワース家を頭とした旧ホイッグ・アリストクラシーに対しましては も早神秘的な共感を抱いてはおらないのです。、、、あなたは彼らを同盟のくずと申しましょうが、彼らは今やW・R自由党の主体なのです。」しかしながらF伯や多数のホイッグ・ジェントリーはアパシーというよりは求められた援助を与えまいと決心する。彼らは、とりわけF伯は同盟の綱領に全く反対の立場をとっているわけではなく、むしろ擁護者であって、彼が同盟に同調できないのは同盟の目的ではなくてその手段だけであった。穀物条例の廃止、ピールの敗北においてF伯たちは勝敗のあり方に驚愕した。四六年夏デニスン（保守党議員）はラッセル卿の組閣に当って彼があまりにも商工業の勢力、「議会での大都市の代弁者」に恩恵を与えすぎるのではないかと批判した。F伯はこうした批判をラッセル卿に呈したが、ラッセル卿は内閣

には六、七名の土地所有者の代表がおり、一人の商人も工場主もいないと答えて批判をかわす。しかし不満の根拠は勿論より深いところにあったのである。いわば時代そのものにあった。「民衆的民主的原理が近来、とりわけピールが保守党を分裂させ貿易業者の利益を土地所有者の利益に優先させて以来、非常な歩みを続けていることはまぎれもない事実である」(デニスン)。地主層は自己の権力が州や国家の政治で正統な地位を奪われてしまい、中産階級あるいはデモクラシーが支配する時代がくるのではないかと予感したのである。彼らの見方からすれば「アリストクラシーが自己の利益のためばかりではなく、全共同体の最良の利益のために統治制度のスタッフとなって政治する」のが正当なのである。従って同盟の議会外圧力というものは革命的な危機であると感ぜざるをえない。

こうした「危機」に面してF伯はホィッグの偉大なタクティックス、つまり「変化の勢力のうちの最も尊敬すべき人たちに対し、時宜をえた妥協をなし譲歩をすることによって、伝統的秩序のうちの本質的なものを保守する」というタクティックスを放棄してしまうのである。リフォーム運動のときはF伯はこのホイッグ(ホイッガリー)主義を捨てなかった。しかし彼は同盟が彼の政治観の基礎をくつがえすものと考え、怒りの余り生涯のプリンシプルを放棄してしまう。つまり州の代表がホィッグとトーリーの間で分けられていた四分の一世紀前の状態に時代をもどそうとし、共通の敵に向うために伝統的な政治のディヴィジョンをすてて地主層のランクを固めようとした。こうして友人たちが驚ろいたことには、彼は保護貿易論者であり保守党員であるデニスンに支持を与えてしまうのである。

総選挙の直前教育に対する国庫補助の問題についてリーズのディセントとコンフォーム―セクトの間で分裂が起った。しかしこの分裂はコブデンを立候補者とすることで解消する。そして結局コブデンとモーペスが候補者として選ばれデニスンは辞退してしまうのである。コブデンの選出は政策の問題を別にして、多くのホィッグ(トーリーの間でも)の中に非常な怒りをまき起した。彼は他国者(よそもの)であって、これは州政治のしきたりを破るものであった。また彼の選出はマンチェスターの指令によって動かされたとみられたのでヨークシャー人の誇りと独立の侵害であるとされたのである。

F伯はコブデンが立っときくや直ちにデニスンに手紙を書き、彼とモーペスが立つことを期待し、デニスン(保守党)にできるだけの支持を与えることを約するとした。この手紙が二時間程早くつまりデニスンが辞退する前に到着したら、とF伯の側の人

々は考えた。彼らは既にモーペスとコブデンへの支持を約束してしまったのである。しかし多くの人々は手紙にあふれる感情には賛同し、次期選挙こそF伯がヨークシャー人や彼自身に対する侮辱に復讐すべきであること、そのためには彼の息子の一人をW・Rで立候補させるべきであると返信したのである。しかしホイッグの怒りの背後には慎重さとコモンセンスもあった。F伯の顧問弁護士は次のようにF伯に答えている。「四千にものぼる登録者は非常な魅力です。、、、我々の党はこれを利用してゆかねばなりません。党が彼らを指導しないなら彼らは自分自身の指導者を選んでしまうでしょう。将来の選挙は登録所で決まるといってもよいでしょう。私は近来あまねく行なわれている登録運動を閣下におすすめはできません。がいつのまにか無力になってしまっていることのないように投票者や彼らの政治に十分通じさせるようなんらかのシステムをおすすめ致します」。またウッドは「自由党は今まで我々が指名した人たちを支持してきました。しかし今度は我々は彼らに指導者を与えませんでした。だから彼らが自分で指導者を指名したのでありまして、非は彼らにではなくて我々にあるのです。、、、こうしたことによって党を分裂させないようにすることが我々のなすべきことです。きびしい活動をなし四千の多数を獲得するために文字通り奉仕したものがそうした力を利用しないようになどとは期待すべきではありません」。こうした結果は単にマンチェスターの陰謀であるなどとはなさるべきではなく、都市民の反逆、彼らを指導し彼らの見解や利益にふさわしい考慮を払わなかったホイッグ・リーダーシップの失敗から起った反逆であった。間もなく一八四八年モーペスがカーライル伯となったので議員の空席が生じた。この間党内の地主と都市民との間で何ら調整の努力はなされなかった。そればかりかF伯は貴族が当然になしうる命令によって分裂をうめうると信じ、この権威を行使しようと決意を固めていたのである。直ちに彼は息子のチャールズを候補者として指名しこれを都市の後援者たちに通知した。そしてアジテーションが起る間がないように、出来るだけ早く選挙布告を発すべきことを当局に督催した。息子がトーリーの気に障る意見を出さないということでトーリーの指導者から中立の約束をとり、選挙の至上目的は「特殊的な—地方的な—目的であり、昨年の恥ずべき侵略からW・Rを解放すること」であるとしている。チャールズは父親の最も意にかなう息子であった。つまり、彼は二二歳の若さであって公生活の経験もまた自己の政治的意見も全くもっていなかった、従って父親自ら選挙演説の草稿を書き意見を供給することができたからである。

ところがまさにそれ故にチャールズの選出はW・Rにおけるウ

エントワース・ウッドハウス家の支配をかけた捨身の主張とならざるをえなかった。これは有力なホィッグを憂慮せしめるものであった。完ぷなきまでに打破られるのではないかと思われたからである。党首であるフォークス、F伯の長男の未亡人、ウッド卿たちはチャールズよりももっと経験にとみW・Rでもっと名の通ったしかも産業勢力によってうけいれられ易い人を推したらどうかとすすめた。しかし慎重さよりも迅速と果断とを求めF伯は急拠候補者指名の党会議を開かせる。しかし地主たちは開催の後までそのことを知らなかった。ところがリーズ自由党はこの会議以前に集合する機会をもつことができた。だがこの会議で、幾人かのウルトラ自由主義者を除けば一般的空気は甚だ穏かで、商業の利益は既にコブデンにより代表されているのだからこの際候補者の指名は地主層に委ねらるべきだという決議が通った。ただ候補者には、自由貿易、経済改革、投票権の漸次的拡大、宗教団体への新らたな国庫補助の廃止等四つの条件がふされただけであった。地主ジェントリの会議はチャールズを候補者として推し、また同時にリーズの四つの条件を全部了承した。ところがF伯は貴族の当然な支配以外には頼るべきではないとし、演説の草稿では四つの条件にはふれず、トーリーでも掲げられるような漠然とした一般的なことしか述べなかった。こうした彼のやり方は三二年以来つくられた中央委員会の手から選挙機能をとり上げてしまい、都市の感情を昂ぶらせることによって政党構造を破壊する危険をもつであろうことは云うまでもない。F伯はホィッグとトーリーのジェントリから支持を約束する手紙を山とつみ上げることはできた。がしかし都市の反対が組織されるならそれも役に立たないであろう。実際リーズのリーダーシップの下にF伯反対のグループは形成されていた。このグループが直接争点にしている問題は宗教上のものであり、そのバックは唯一教徒、組合教会派等であって、彼らはいかなる宗教にも（当面ではアイルライドのカトリックの僧侶）国庫補助を与えるべきではないとしていた。選挙はチャペルとチャーチとの戦いという色分けをとってはいたが、戦いはW・L党内での地主層と都市中産階級の争いであることは明瞭であった。F伯も自らこうした形で戦いを組織化したのである。

W・L党内の通常のチャンネルに失望した反対派自由主義者は工業地帯から派遣された委員会を開き、F伯に連絡して自由主義の枢要な点についてチャールズに明確な意見を表明させるように説いた。F伯はこうした動きが大変な僭越であり、《全く独裁的な方法》なりとして、息子にはこうした圧力に絶対に屈することのないようにとさとした。F伯にとっては、議員というものは自由な代表者であるから候補者が議会内での将来の行動について誓

約を立てねばならない、などいうことは恐るべきことであった。ジェントリーもこの点について異存はなかった。だが彼らは、自由党系の人の投票を求める人は自由主義者であるべきだという点については、反対派と同意見であった。個々の宣誓と政治的原則との差は実際上必らずしも大きくはない。問題はF伯が息子にトーリーを刺戟するような言葉を一言も口にすべきではないとしたことにあったろう。

こうしてF伯の試みが挫折することは避け難くなった。F伯もついに宗教上の点を除き自由主義の信条を表明させるが、も早おそきにすぎた。チャールズは選挙運動でリーズの集会に出席したとき政治問題についての全くの無智をさらけだしてしまった。こうして彼は辞退を申しでることになってしまう。F伯はこれを男らしくない行為として反対はしたがいかんともなし難かった。F伯はリーズの運動を都市の（ベイン等の）下層アリストクラシーが起したものであり、リーズの上層階級は旧貴族の味方であるといった。なるほど後者は商工業の二、三世代で地方ジェントルマンになりつつあり社会的には上層階級に近くはあったが、政治的にはも早そうではなくなっていた。前者は非国教徒のサークルの中でしか有力ではなかったが、党地方組織を運営する地方有力者となっていたのである。「都市民は単なる財産の一片として代表権を一権門に捧げることを拒否した」のである。

ホイッグの側はチャールズに誰かをかえるという試みはなさずに静観し、トーリーの側でデニスンを立てることを黙認した。トーリーとホイッグの権門がデニスンを立てることで協同するということは以前から問題になっていた。トーリーは今や地主ジェントリーを吸収する機会にしようとさえ考えた。デニスンは多くの点でホイッグにもうけいれられる条件を備えていた。政策的には保護貿易論者ではあったが四八年選挙ではピール派に非常に接近していた。しかし彼が立候補しょうとしたのは政治上の見解によるよりは、個人的な資格であった。彼は俊敏な性格をもち、ライディングの種々の産業層と知りあった小地主であり大北部鉄道の会長でもあった。F伯は大多数のW・L党の人たちよりも個人的にはデニスンに遙に近く、彼の立候補についてトーリーの指導者と交渉を重ねた。しかし彼の友人たちは、トーリーとの積極的な同盟は軽卒でありW・Lの主義を将来危機に陥入れるものであるし、この際中立だけでデニスンの選出が確実であることを指摘してどうにかF伯の試みをやめさせたのである。

ベイン・グループは再び候補者を立ててデニスンと戦った。得票はそれぞれ一一、八〇〇と一四、七〇〇でデニスンは勝った。この選挙でホイッグは棄権したのであるが、ベイン・グループは約

一万二千の投票をえた。この数は四千から五千とふんでいたF伯をおどろかせる結果であった。ベイン・グループが自由党系の投票を大部分えたという事実はホイッグ－トーリー協定で進もうとする考えに終止をうったであろう。不利な条件でベイン・グループはこれだけの投票をえたのだから、次の機会に彼らがいかにおそるべき結果を獲得するであろうか。ホイッグがトーリーの側に加わったところでどれだけの投票者をつれてゆくことができようか。彼らにとってよりよいタクティックスは、多数の自由主義者の得票に結びつき都市民との新たな協約をなんとかつくり上げ、ホイッグ、リベラルの以前からの枠を再建することであろう。こうしてのみホイッグは一つの議席をものにすることができるだろう。リーズの《上層アリストクラシー》の一人はこういっている。「ホイッグがトーリーと全く混和してしまうのは嘆かわしい。政党の区分が原則の差異によってではなく、階級の差異によって、つまり一方で貴族、地主ジェントリ、チャーチ、他方でデモクラシー、都市民、ディセントという差異によってつくられることは好ましくない」。だがこうした政党制が回復されるには年月が必要だった。

一八五二年の選挙運動ではホイッグの旧家やジェントリからの援助がなくとも党の運営と財政が可能であることがわかり始めた。こうした事態に面しウッドは「低政党」が独立した党管理を確立する前に、「高政党」は自己の管理者を委員会に送り込むべきだとF伯に進言した。低政党も財政上ホイッグからの資金をうけることを拒絶しなかった。五二年総選挙は統一の機会を提供した。ホイッグとリベラルとが一致をみることは殆どなかったが、再燃した自由貿易論争は過去の共同戦争の伝統をよみがえらせるに到った。回復した協同は二議席を獲得する程にはまだ堅まってはいなかった。つまりジェントリー層はデニスンが穀物条例の復活に反対であることを明らかにした以上彼の選出と争うべきではないとしたからである。協同は都市の力にこたえ都市の条件に服すること、つまりコブデンを再選出するということでよみがえったのである。

五七年の選挙ではコブデンはW・Rで立候補しないことを明らかにしたから、こうした協同の空気は候補者を再びホイッグから選ぶことに作用した。(結局この候補とデニスンが選ばれた)。候補者選択の集会ではジェントリーの勢力は五二年のときよりも遙に強く、F伯に非常に近い人たちも出席した。五二年にはW・L党の地主層と産業中産階級との統一は極めて強固になった。年老いたF伯は死んで苦い過去の名残りは消えた。有利な条件が更にいくつか加わりW・L党は二名の候補者を立てる。一人は地主一

人は急進派の工場主であった。トーリーも地主を一人立てて争った。地主ジェントリーがこの地主の候補者の方を工場主よりも支持するのではないかという疑念もなくはなかった。がW・L党の同盟は堅く党推薦の二人の候補者を当選させることができた。ウッドはこう述べている。「地主である私はW・Rにおけるホイッグ派地主の全体とともに一人の工場主が地主候補者の同僚となることを望むのであります」と。次のF伯チャールズもこの協同に全服の支持を与えていたのである。

こうしてW・L党内の両派の固い同盟が両建された。ところでこの同盟は両派の平等の基礎の上に立つものであった。というのは五九年の同盟は単に動揺した旧い関係の遺物ではなくして、都市民が独立の時期を介して勢力を増大させ、他方ホイッグ、ジェントリーが変動する時代に譲歩しつつ有効な適応能力を再び発揮したことによってえられた均衡だからである。

本論文は一地方の政治を介して、産業の進出という新らしい情況に面したホイッグ地主層がホイッグ・リベラルという政党の枠の中あるいはその周辺でいかに対応し適応していったかというプロセスを扱ったものであるといえよう。紹介者の観点に立ってここから二つのテーマを取りだしてみよう。

一、ホイッグ―アリストクラシー、一般に旧アリストクラシーの新らしい状況への適応という問題。

二、この適応における政党の枠あるいは政党への忠誠心という問題。

十八世紀的な英国政治構造の特徴は、既にネーミアが古典的に分析したように、パトロネージというかたちをとったアリストクラシーの支配に、従って他方で（ホイッグ・トーリーという）政党制の弱体、つまり政治的原則及び規律体としての政党の弱体にあった。貴族やジェントリーに対してとりわけ農民は、また貴族に対してジェントリーは、それぞれ伝統的な服従をなしていた。借地農の政治的意見というものは殆ど問題にならず、「彼らはホイッグ、トーリーいづれの党に対しても、そもそも政治というものに対しては、余り関心をもちません。そういうことで領主といさかいをするなどということは考えておりません」。バラーにおいても、ポケット・バラーやロットン・バラーに典型的に見られるように貴族、ジェントリーの勢力は強大であった。大多数の選挙では投票さえ行なわれず、アリストクラシー間での妥協によって議員が選出されてしまうのである。[3]「無投票のあるいはラッセルの言葉を使えば妥協による選挙の重要ないみは、支配層とく

に州の支配層がいかにたやすく選挙権者の見解に対し正式の考慮を与えずにすましてしまうか、代表者をいかにたやすく実際に決めてしまうことができるか、ということである。」このような政治構造は産業主義の発達と中産階級の勃興によってやがてインパクトをうける。インパクトは先づ三二年のリフォームとして口火を切る。リフォーム直後の議会の政治状況（例えば議会のメンバーの構成）には大きな変化は起らないが、(4) やがて間もなくインパクトは支配構造に加わってゆく。こうした状況に面して旧アリストクラシーはいかに適応しようとするであろうか。

「変化の諸勢力のうち最も尊敬すべき人たちに対し、時宜をえた時点で、譲歩し彼らと妥協する、そして伝統的秩序のうち最も本質的な要素を保存する」という態度は、社会変動に面して現われるホイッガリーである。ところでこの精神が具体的な状況に適用される方法はしかし単純ではない。ホイッガリーはそれ程「ものわかり」はよくないし、移行はそれ程なめらかには行なわれ難い。先づ、伝統的秩序のうち何が本質的なものであるかについて問題があり、更に、「時宜をえた（タイミングのよい）」時期はいつかの問題がある。こうした問題について、一方には、最も固守的な人たち（F伯たち）、他方には最も「妥協的」な人たち（ウッドたち）がおり、両者の見解が分れてしまうのは当然であろう。

先づ「時宜（タイミング）」についてのべよう。ホイッガリーは譲歩と妥協の「時宜」を見はからう。ところで、時宜は物理的時間の尺度によっては決定されえない。つまり、単に「おそければおそい程よい」とか「早ければ早い程よい」というものではない。旧きよきものはできる限り保存さるべきものである、が他方では譲歩がおそきにすぎれば旧きよきものは加速度的に破壊されてしまう危険があるからである。では「時宜」はいかにして証明され決めらるべきであろうか。一言にしていえばそれはインパクト―反抗の強度に依存する。ところが、「反抗の強度」というものは、その概念自体にあいまいさがある、ということを別にしても測定するのに困難である。ある集団がもつ「実体的」な力あるいは「潜在力」というものの大きさ、従ってまた潜在的反抗「力」というものの大きさは直接測定することができない。反抗力の強さの測定は反抗力が反抗現象として実現された（intrude した）後にのみ知る外はない。しかもなお、現象化（イントルージョン）は「潜在的反抗力」に対する対応のタクティックスによって左右されてしまう、対応自体によって「実体的」な反抗力は「デヴィエイト」されてしまう。政治的適応の課題にとっては、「実体的」力を測定するということは逆説である。つまり測定行為自体が不可避的に無限に多様な「デヴィエイション」を惹起させ、測定はこうして常に「デヴィエイト」さ

れてしまった「力」の測定に終るのである。

反抗「力」を測定するために、それをトータルに現象化させてみる、反抗を極大化させてみる（革命）ということは適応のタクティックスとしては最低のものである。一度び極大化した反抗は反抗テのこんせきを以後永久に止めてしまうのである。潜在的な力を出しきらせないこと、ここに政治的適応の妙味があるのである。

デモクラシーというものは、反抗の強度を投票数によって象徴化する、その限りでは確かに適応の観点からも進歩であるといえよう。だが、数というものは所詮象徴にすぎないものであり、それ自体力、ダイナミックスではない。数というものは移り易いものであり、それは適応のタクティックスによって多数は少数に、少数は多数に変えられうるものである。従って、数というものが一定の力をもつことを証明するためには、単に一時的な数に依存することはできない。数がその表示する力をよく象徴すること、つまり反抗現象が「潜在的反抗力」、「実体的」な力であることを証明するためには、反抗現象が現象世界での一定の条件にパスするかどうかという仕方をとる外はない。

旧きよきものを保存する、という前提の下で反抗力を測定するためには、典型的には、新らたに起った反抗現象が一定の抑圧や反説得という条件を加えられながらあるいはそれらの条件を加えられているにもかかわらず、相当の期間に亘って持続するかどうかを観察すればよい、むしろそうする外はないといえるだろう。この際、抑圧や反説得の強度やその期間のながさは、反抗を加速度的に増大せしめないというような限界内に止められなければならない。そうでなければ測定行為自体が本来の目的である適応自体を害ってしまうからである。反抗の強度の測定は抑圧と反説得の「トライアル」としてなされうるのである。こうした観点からみれば、F伯の逆反抗も新らしい勢力の潜勢力を測定する一つの「トライアル」とみられないこともない。このトライアルとそこから起った都市中産階級の独立化の動きがなかったとすれば、地主層は譲歩しようとする決意を固めることはできなかったであろう、たとへ譲歩しても心の整理をつけることはなかなかむづかしかったであろう。F伯のトライアルとその失敗があった後でのみ、彼らは後退する決意と、後退した新らしい地点で再出発する決意を固めることができたのではあるまいか。

トライアルとしての抑圧と説得という観念があるからこそ、英国において「支配層の抑圧が加わるのは、支配層の譲歩の時期が間近いことのきざしだ」といわれるのである。支配層は譲歩の決意を固めるために抑圧する、といってもよいだろう。あるいは彼らは反抗を予想し、許容している、とこれを云いかえてもよいだ

ろう。

トライアルのプロセスにおいて支配層は、通常妥協派と固守派に「分裂」する。この「分裂」において両派はそれぞれ互に役割を果す。しかもこの役割分化は、とくに妥協派の場合には意識されてもいる。固守派は固守が失敗した時には、妥協派にとってのスケイプ・ゴーツとされる、そして固守派自らもしばしばそれを意識するのである。(5)「分裂」している両派は、左翼政党が陥り易い危険、近いもの程攻撃を加えるという危険からまぬかれている。ここの例でいえば、例えばF伯とウッドとはトライアルの間中またその後も文通しており、とくに後者はときどき前者の行きすぎをいましめている。

にも拘らず、トライアルは危機を含む。トライアルの過程で新しい勢力は反抗を爆発させてしまうかも知れない。地主層に対して彼らは政治的階層としての地位を拒否してしまうかも知れない。しかしこういう事態は起らなかった。「産業層は政治的活動層となる財産も暇もない」ということは確かにその理由の一つであろう。しかしより重要な理由は産業的中産階級の中にも旧いアクストクラシーが伝統的な政治的階層として蓄積した実績を信頼する念が存続していたからであると云えよう。ということはこの中産階級が旧いアクストクラシーの逆反抗を一つの試錬とみていたといってもよいであろう。中産階級は支配層のトライアルの論理そのものを意識していたからであるとさえいえるであろう。とりわけこのことは「一撥」的にならなかった「尊敬すべき中産階級」層についていえるであろう。被支配者はトライアルを経、これに合格してのみ政治的影響力を制度の中に確立することができるのである。抑圧と逆説得は政治的階層にとりいれられる試錬であり、これに堪えて反抗しつづけることは政治的階層としての資格条件となる。こうしてトライアルはゲームである、しかもその定石は開放さるべき階層の間に知られているのである。

F伯はリーグの時期に最も硬化した固守派になったが、リフォームの時期にはホイッグの妥協派に属した。この「違い」は変節といわるべきものではなく、逆に何が伝統的秩序の本質であるかについての一貫した見解をもっていたからであるといえる。F伯にとって本質的な伝統的秩序とは、アリストクラシーが政治的階層の頂点にあって他の階層を統制し、全共同体の利益のために統治するということ、社会的経済的には地主層と産業層の利益を均衡させるということとこれであった。こうした見方は当時の支配層及びすぐれた思想家（例えばコールリッジ）に共通したものであった。こうした見方をとるF伯はリフォームによってはこの秩序

がくづれることはないと信じたが――この予測は間違っていたことはリーグの運動によって証明されるのだが――マンチェスターやリーグの運動の場合にはこれを破壊するものがあるとみ、この運動に一歩も退こうとはしなかったのである。地主層はこれ程硬化はしなかったが、F伯と共通な心情は抱いていたであろうし、なによりもF家に対する忠誠心によってF伯の抵抗に従った。これに対しウッドに代表されるような妥協派もあった。彼らも伝統的秩序についての見方ではF伯らと共通したものをもっている。相異はただ旧アリストクラシーによるリーダーシップのあり方での変容及び、地主と産業層の均衡点の移動が伝統の本質を破壊してしまうか否かの見方にあった。妥協派はこの変容と移動の承認を後退とはみたが、本質的な伝統的秩序は維持できると考えた。ところがF伯がもっているアリストクラシーのリーダーシップのイメージは旧来の貴族的な統制であった。都市民たちは最早これには服そうとはしなくなり、その最も急進的なグループ（ノン・コンフォーミストたち）は議員宣誓を要求するまでに硬化した。F伯にとってはこれは伝統的秩序からの許すべからざる逸脱であり、「独裁」であった。これに対しウッドたちは新らしい勢力が増大したことを認めて後退しそれに譲歩する、とともに新らしい勢力の要求を政治的に代表してやること、むしろより積極的に適切な要求を彼らが抱くように指導すること、こうすることによって本質的な伝統的秩序つまり政治的階層としてのアリストクラシーの優位を維持しようとしたのである。だからこそ、旧アリストクラシーが伝統的な貴族的統制からそれる要素を放置してしまい新らしい状況に見合ったりリーダーシップをとらなかったということ、新らしい勢力が自己の中からリーダーを選出してしまったということ、このことではアリストクラシーの側に大きな責任があるとされたのである。

同一の伝統でも人によりまた世代によってその「本質」的なものとされるものは変る。妥協派が本質とみたものはF伯にとっては伝統の本質的崩壊体であったろう。後者にとっては貴族的統制こそ伝統の本質的要素をなしていたのである。このF伯でさえリフォームは伝統の本質にはふれないとみて賛成したのである。トーリーは伝統が崩壊する第一歩とみたのではあったが。それぞれの時期の、それぞれの世代の妥協派は譲歩によって伝統の本質的な要素は維持できると考えた。こうして我々は同一系統の伝統の本質というものが相対的に変りうるものであったこと、あるいは伝統の本質について世代毎に見解が変ることを感ぜざるをえない。現在の英国においてアリストクラシーの伝統意識にはもはや経済的優位の意識はなく、社会的な優位と、政治的階層としては、

「自然」の優位ではなく noblesse oblige としての国民への義務意識における優位があるのみである。こうして伝統の本質についての見解は世代的に変化する、が他方変化にはまさに世代による限度がある。一度び生きたよりよき世界というものを人は容易に放棄することができない。また刻々の変動に限りなく妥協していくということはできないし、もしできるとすればそれは政治的無責任となってしまうだろう。社会変動に対する適応は世代単位の適応であってよいといえるかもしれない。

ホィッガリーの適応において地主層の経済的優位性は伝統の中の最も本質的なものだったのではないかという問題はある。つまり四十年代で穀物条例の防衛に現われた地主の経済的利益の維持こそF伯や地主が固守の立場に立つに到った所以であり、また六〇年におけるホィッグ・リベラルの妥協は結局穀物条件廃止後、当初予想された結果とは異なって地主・農民が繁栄したという有利な条件によってのみ可能になったのではないか、という問題である。この点に関し論者の説明は必らずしも十分とは云えない。論者はホィッグが同盟に反対したのは穀物条例の廃止、自由貿易ではなくて、同盟がとった「手段」、運動方式であるということを指摘している。この説明は重要ではあるが完全ではない。第一に、運動方式に反対するという「口実」のもとに実はホィッグは自由貿易そのものに反対していたのではあるまいか、第二に、彼らは自由貿易が農業を衰退させるという予想をいだいたであろうか、という疑問はまだ残っているからである。だが行論の間にこの疑問をとく説明がないわけではない。F伯がチャールズを選出しようとする最後の段階で、都市民が強く提案した四つの条件に対して彼は一つを拒否したが穀物条例廃止を含む三つの要求については明示的に譲歩したということである。地主ジェントリーはF伯以前に既に譲歩している。こうしたことをみれば第一の疑問はかなりの永解するであろう。第二の点については全くふれられていない。六〇年代におけるホィッグとリベラルの妥協が、一般的によく云われているように双方の物質的繁栄によって容易になったということは否定できないだろう。従って妥協における「ホィッガリー」の機能もその限りでは割引きできるかも知れない。しかし穀物条例の廃止が――レッセ・フェールが全国民に富をもたらすであろうということをドグマチックに説く人々を除けば――地主層によい結果を生むであろうという確信を少なくともちえない四〇年代にさえ、妥協派（ウッドたち）がいたし、多くのジェントリーが妥協的になったということは注意さるべきであろう。

こうした妥協をなさしめたもの、それにはアリストクラシーの保守的リアリズムがあることは否定できないだろう。がそれには外

の要素つまり政党への忠誠心からくるものがあった。少なくとも政党はこの保守的リアリズムが機能する枠をなしていたのである。

地主層が経済的利益をある限度でぎせいにしてまで保守しようとするものがあった。それはとりわけ政治的階層としての優越した地位であった。ところで、リフォーム運動の頃から政治的階層の構造は政党制というフレイムを形作り始めていた。政党はかなり自己への忠誠を求めつつ、政治行動を規整しぎせいを「強要」しつつあった。F伯がトーリーに接近し始めたとき、周囲の人々をしてF伯に思い止まらせるようにさせたものはこの政党というフレイムであった。十八世紀ではこうしたことは余りみられない。政治上の原則は現実政治で余り機能しなかったし、政党も個人にとって余り実効性のない伝統的な象徴にすぎなくなっていた。十七世紀でさえ政党は「傾向」的な原則ではあったが、党規律はもたない。[6] 十九世紀は、余り実効性のない象徴としての政党、個人的利益やコネクションという以前の政治構造を局限しつつあった。十八世紀的な政治構造を現代の政治構造と区別する重要な特徴は党規律にある。この間にあって十九世紀の政党は勿論現代程の厳しい党規律はもっていない。中央政治ではとくにそうである。ピールの「裏切り」やパーマーストンの閣員歴任にそのことはよく現われている。しかし「裏切り」は党規律のイメージがあってのことである。とくに地方政治では政党の枠はより強く仂く傾向をもっていた。ライディングの政治はこれをよく例証している。因みに、十八世紀でも中央よりも地方で政党象徴はより強く機能していた。[7] ところが、通常、政党の組織は旧いアリストクラシーの影響力と競合して、あるいは対立して進むといわれている。この現象は確かにライディングの政治にも現われている。しかし党のフレイムはアクストクラシーの支配において既に相当形成されていたのである。[8] こうした場合、政党間の争いは極めて特徴的な様相をとったはずである。この特徴的な様相こそ現代に到るまでの英国政党制、一般に英国政治構造を特徴ずけるものなのである。アリストクラシーは中産階級のインパクトに直面しこれに適応していったが、この適応は具体的直接的には政党内でリーダーシップを維持するという課題となって現われたのである。彼らが頂点に立っている政党は党を拡大維持するという政党自体の論理によって、中産階級に一定の「服従」を求めたが同時にアリストクラシーにも禁欲とぎせいとを求めたのである。アリストクラシーは共同体全体の利益という観念を単に「イデオロギー」として使ったばかりでなく、彼らなりの視座によってそれを実現しようとした。

がしかし彼らの政治的指導層としての要求にはエゴイズムあるいは「シニスター・インタレスト」が強く仂いていたことも見逃せない。こうしたアクストクラシーの情熱は政党制の論理という枠によって濾過されやがてそれは政党への忠誠という観念に変形していったのである。ホイッグの地主が政治的に争う敵は先づもってトーリーとなるのである。この観念こそ英国政党制に内在する最も重要な特色となった。

党への忠誠は階級への忠誠あるいは階級意識に基く党への忠誠と同じではない。F伯が旧アリストクラシーとして自己と階級的にはより近いトーリーに接近しようとしたとき、政党の枠が彼を止めさせたのである。「政党が原則によって分れないで、階級によって分れること、つまり一方では貴族、ジェントリー、チャーチ、他方ではデモクラシー、都市民、チャペルというふうに分れることは好ましくない」。政治的対立を階級間の対立としないこと、あるいは少なくとも上層では階級的に等質的な二元的政党に近づけること、ここに英国政党制の特徴があった。政党は「現実の」社会構造、社会階級の直接の反映ではなく、政党間の争いは階級間の争いではない。従って政党への忠誠心は階級への忠誠心と同じではなく、またそれは階級への忠誠心によってその理由を説明しつくすことはできない。更に利益や政策の一致という理由を加えても説明しつくすことはできない。政党への忠誠は政党への忠誠そのものであって、合理的にその根拠を説明しつくすことはできないものであった。そこには固有名詞での政党―政党象徴そのもの（いわば紋章）への執着忠誠心が内在している。政党は自己の名によって自立したのであり、自己の生存拡大の法則によってメンバーに忠誠とぎせいを要求したのである。勿論政党象徴はある傾向や原則の象徴でもあった。しかしそれはそれ以上のものであって、その限りで自立的なのである。このためにこそ、政党は傾向や原則に対し「技術的」にオポチュニスティックに接近してゆき、それを採用することができた。政党の柔軟性を可能ならしめたのはまさにこの政党象徴の自立性であった。こうして英国の政党は政党がイデオロギー的に基礎ずけられイデオロギーの象徴とされる全体主義政党とは異質の忠誠心を要求した、従ってまたそれとは異質的な一貫性を獲得した。それは政策利益階級の相異に対して「柔軟」でありうる一貫性によって独得の統合様式を発揮した。政党象徴への忠誠のこの「非合理性」こそ、本来的に合理性の貫徹できない現実政治の中で政党に柔軟性と一貫性とを可能ならしめたのであり、いわばクッションの役割を果してきたのである。イデオロギー政党はその「合理主義」の過大さの故に分裂の危険を内在させているのである。

こうして英国の政党制は、階級をクロスさせ（少なくとも上層では）同質的な階級構成をもつようにさせたから、従って階級固有の伝統的文化や先入見を双方の政党に分与させ相互の交通（コミュニケーション）と理解を容易にさせたから、政党間の争い、即ち政治の争いは「余裕」をもって行なわれ、各政党象徴を軸にしたいわばゲームの争いとなったのである。政党制は政治のゲームのフレイムであり、政党象徴への忠誠はこのゲーム性を支えるバネとなっている。こうした政治の「非現実性」「なれ合い」は急進主義者（ベンタマイト）の批判の的であった。政党の階級別分化というゲームを困乱させる動きは常に存在した。だが政党象徴への忠誠の要求はこうした動きを抑制したのであった。がもし「アリストクラシーが社会的にも政治的にも同質な一つの集団となり、議会を統制していたなら、政治的抗争は極めて深刻となったであろう」し、「大衆の反逆」は極めて尖鋭化した形で行なわれたであろう。十九世紀末ホイッグ地主層と上層中産階級の保守党への移動が行なわれたが、それはまさに英国政治の危機を象徴するものであった。しかしここでも自由党は新しい情勢に向って変容して一時的ながら勝利を収めたし、それ以後、少なくとも政治構造全体の新しいバランスを媒介していったのである。保守党の第二次大戦前後の変容と適応についてはここに云うまでもない。

アリストクラシーは政治的階層として有利な絶対的条件、閑暇と財産をもつものである。加えて英国アリストクラシーは実績ある遺産をうけついだのである。十八世紀のアリストクラシーはこうした有利な条件に安住しすぎたかもしれない。だが彼らは中産階級（次いで労働階級、現代では更に新中産階級）の勃興と反抗に面し、自己の上層階級としての地位を確保するために次々に譲歩してきた。十九世紀末以来産業主義やデモクラシーが更に進み、次第にその下にある階級との区別は小さくなってきた。こうした「危機」に面してアリストクラシーは、自己を彼らから区別し彼らより優越した地位を維持するために、優越の根拠、そもそもアクストクラシーの存在根拠を、共同体全体に奉仕する貴族の責任観 noblesse oblige に求めたのである。

なお現代においても政党象徴そのものへの忠誠心が極めて大きな役割を演じていることをつけ加えておこう。(9) 現代大衆デモクラシーにおいてそれが果している役割は極めて興味のあるものであり、稿を改めて取扱うことにする。

註1　N. Gash, Politics in the Age of Peel, p. 11.

註2　H. J. Hanham, Elections and Party Management.

註3　例えば一七六一年の総選挙で投票が行なわれた選挙区は、全選挙区三一五のうち四八、つまり六分の一足らずである。Namier, The Structure of Politics, p. 159. なお本論文で扱われている時期でも半数前後投票が行なわれない選挙区がある。Gash, ibid., pp. 440～1.

総選挙	1832	1835	1837	1841	1847
選挙区の数	401	401	401	401	400
非投票区	124	174	150	213	236

註4　Gash, ibid., pp. 106～　, E. Halévy, Hist. Eng. People, III, p. 63. なお「大きい産業都市や首都を除けば英国の選挙区は生れや教育や社会的地位によってジェントルマンとされている人たちを議会代表として選ぶのを常とした」。ディセンターでさえそうであった。本論文にも関係のあるベインは議会内でも指導的なディセンターであったが、ホイッグに対する忠誠心は不動のものであった。しかも彼はディセンターの中の例外ではない。Gash, ibid., pp.109～10.

註5　ホイッグ（妥協的）とトーリー（固守的）の関係もこうしたものであるといえなくはない。

註6　Penington and Branton, Long Parliament., Jones. First Whig

註7　「二つの政党間で相異がなお実在している際にも敵意は中央でよりも地方ではより激しいかった。一七一二年にアディソンは次のように書いている（Sir Roger de Coverley）。《党精神は都市よりも田舎でより強い、党の頭株は上品な変りなき交際をつづけているが、田舎の下っぱは反対党のものとはつき合わない。》」Namier, ibid., p. 277.

註8　政党への忠誠心は英国では、後にのべるように必ずしも政策、利益、政治原則、階級等への忠誠心の単なる反映ではない。より個人的な、友人の集まりとしての名残りが強く残っている。「裏切り」には抽象的な原則に対する「裏切り」の意味もあるが、急場で旧友を捨てたというニュアンスがある。政策についての意見を異にするようになっても同じ政党内に残るべきなのである。

註9　Jennings, Party Politics, I.